

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

⑬

高橋 基

— 近文：…流布本と原典 —

北海道のアイヌ伝説を幅広く収録し、最も流布したのは、更科源蔵の『アイヌ伝説集』であろう。アイヌ伝説が地方別に編纂され、詩人の文章で読みやすく書かれている。

これには、「近文の伝説」として二話掲載されている。二話とも、近文の語源を、「旭川郊外の近文は元の名をチカップニというのであって、鳥のいる木という意味の地名」と、これまで指摘した誤訳が書かれている。二話ともその出典を、近江正一著『伝説の旭川及其附近』としている。近江のこの書は、昭和六年に旭川郷土研究会から発行され、昭和二十九年には、『郷土の地名と伝説』として、加筆され出版された。ここでは、前著の「孔雀伝説」を紹介する。

「近文はアイヌ語チカップニ(孔雀)の棲んだ山の意)より生まれた地名であるが、太古非常に美しい夫婦の孔雀が今の近文山に住んで居た。附近に居住してゐたアイヌ達は、これを神として毎年祀って居たが、何時の頃からか居なくなつた。アイヌは此美しい孔雀を忘れる事が出来ず、此附近にチカップニといふ名をつけた。だから単に近文といふのでなしに近文山と呼ぶ事が本当であるといふ。」

ここには、更科源蔵が書いた「チカップニ鳥のいる木」の訳はない。また、更科は、「この孔雀はもちろん現在の孔雀ではなくて、伝説的な巨鳥フリーカムイのことである」といふと、原文にない文章で、この伝説を結んでいる。しかし、知里真志保によると、孔雀は、「ケソラフ(Kesorap <kes-o-rap 斑紋・ある・翼) — 説話や伝説にでてくる美しい鳥の名。今の古老は孔雀のようなものを想像

している」。他方、更科のいうフリーカムイについては、「フリ(Huri) — 神謡および伝説の中に現れる巨大な怪鳥」(『地名アイヌ語小辞典』)：と、伝説の中でも、それぞれ別な伝説上の鳥としている。したがって、更科のように憶測で原文を歪曲するのは問題がある。

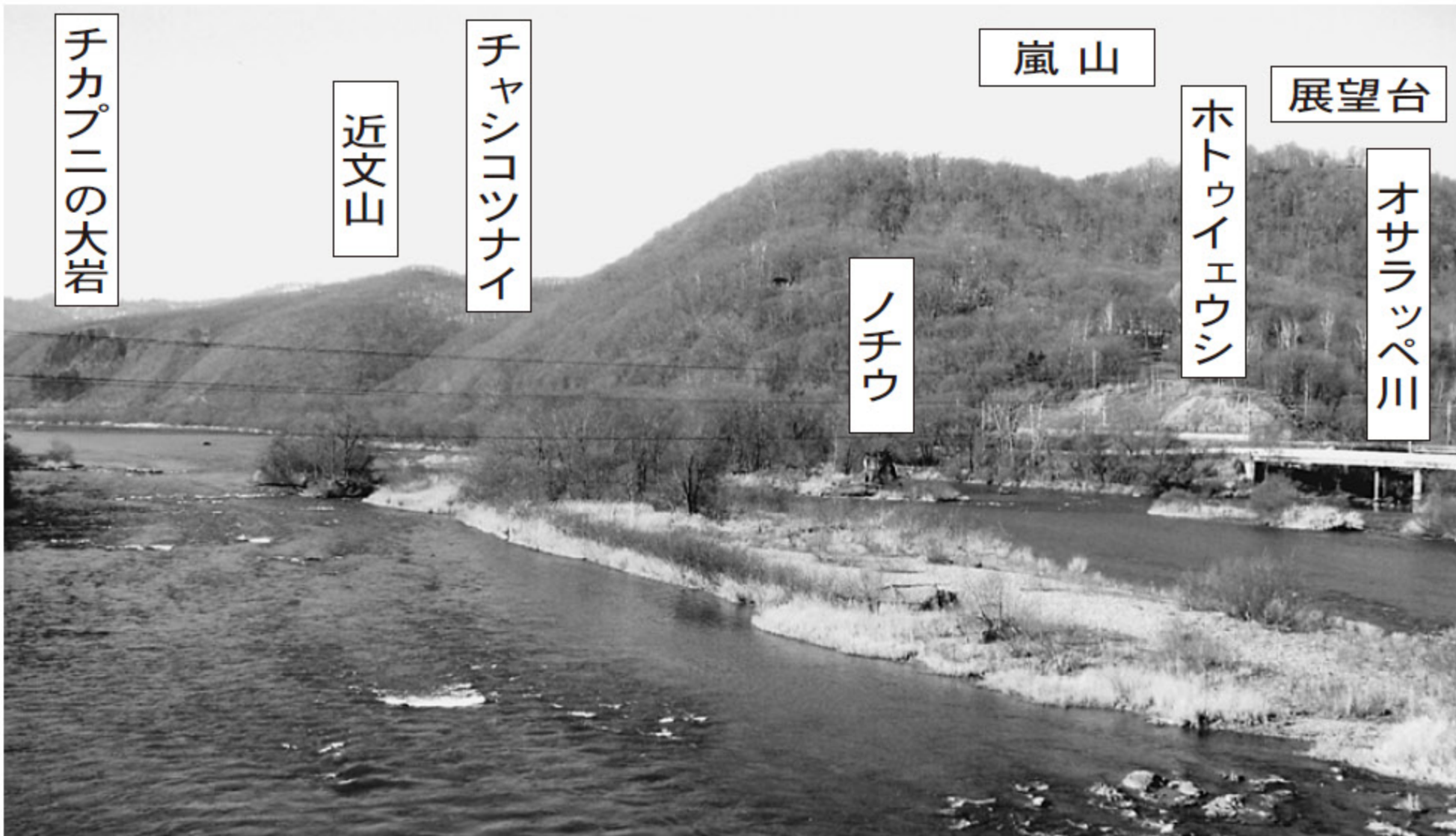
近江正一は、大正九年に旭川新聞の記者として、篤彦生のペンネームで、村山ヨモサク翁からの聞き書きを「アイヌ種族の伝説」として二十六回にわたり連載した。孔雀伝説は第二回の記事。ヨモサク翁は、明治二十一年に第二代の北海道庁長官・永山武四郎が近文山に登り、神楽岡を視察した時、「副酋長ヨモサク」として、和語に通じ大活躍した人物。

新聞記事では、近文山に「チツカブミ」といふ名をつけた」であったのが、昭和六年版では「チカップニ(孔雀の棲んだ山の意)」となり、ここまでは良かったのであるが、昭和二十九年版では、「此の所をチカップウニ(孔雀の巢のある処)」という名をつけました」と誤訳が書かれ、昭和三十四年発行の『旭川市史』の「アイヌ伝説」でもこれを踏襲した。

この他、良く知られている、更科源蔵の『アイヌ語地名解』、旧国鉄の『駅名の起源』の「近文」も、同様な問題点が見られるので、史資料は原典に当たるのが鉄則と、改めて認識させられるのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します



近文大橋から石狩川下流右岸の展望